

学位論文要旨

氏名 藤武義人



論文題目

「The analysis of inflammatory signals in Japanese children with Crohn's disease」
(日本人小児クローン病における炎症性シグナルの解析)

指導教授承認印

石井正浩



日本人小児クローン病における炎症性シグナルの解析

氏名 藤武義人

(以下要旨本文)

【背景】 クローン病の病態には、Th1 と Th17 を中心とする様々なサイトカインが関与していると考えられるが、日本人小児クローン病における詳細な検討はなされていない。今回、我々は日本人小児クローン病の活動期と寛解期における炎症性サイトカインとそれらのシグナル伝達因子の発現を血清と腸管粘膜を用いて解析した。

【方法】 クローン病活動期と診断された 11 名 (平均年齢 10.32 ± 6.02 歳) とクローン病寛解期と診断された 20 名 (平均年齢 11.87 ± 4.29 歳) の検体を血清サイトカイン値の分析に使用した。また、これらの症例の中で、クローン病活動期の 7 名 (平均年齢 13.63 ± 1.94 歳)、クローン病寛解期の 6 名 (平均年齢 9.93 ± 4.33 歳)、健常対照者の 6 名 (平均年齢 9.90 ± 4.88 歳) の内視鏡検査で得られた腸管粘膜組織を用いて、シグナル伝達因子の発現を real time PCR 法で検討した。

【結果】 血清サイトカイン値の検討では、クローン病寛解期と比べて、クローン病活動期における IL-6 と TNF- α が有意に増加していた ($p < 0.01$, $p < 0.05$)。腸管粘膜の real time PCR 法では、クローン病寛解期や正常粘膜の小児例と比較して、クローン病活動期におけるインターフェロングamma と STAT4、TGF- β 1 の発現が有意に増強していた。

【結論】 これらの結果より、日本人小児クローン病の病態には、Th1 と Th17 のシグナルが深く関与している可能性が示唆された。